

— 擬態語動詞の観察を中心に —

吉永 尚 (園田学園女子大学)

yosinaga@sonoda-u.ac.jp

1. はじめに

従来のオノマトペ研究は、擬音語を中心とした音韻的形態的なものが多く、感情・感覚など内的な心身状況を表す擬態語に特化した研究はそれほど多くない。本研究ではこれらの擬態語を用法的に分類し、特に擬態語動詞に焦点を当て、本質的な語彙特性について考えた。心理的感情と生理的感觉の意味的な相違、畳語、促音などの形態的な相違は文法的振る舞いに関与する。

2. 擬態語の分類

擬態語を付加される成分によって分類する。(本稿のデータは章末の〈語彙データ〉を参考にした。)

TypeA : 「する」が付加され擬態語動詞の用法がある。一般的に「だ」は付加されない。²心理的感情を表すものを **TypeA I**、生理的感觉を表すものを **TypeA II** に下位分類する。

TypeA I (心理的感情)

いらいらする、はらはらする、わくわくする、くよくよする、びくびくする、ぷりぷりする、どきどきする、ぞつとする、むつとする、ほつとする、かつとする、はつとする、ひやつとする、どきつとする、びくつとする、むかつとする、びっくりする、どつきりする、さっぱりする、うっかりする、がっかりする、ほっこりする、うっとりする、うんざりする、しんみりする、ぼんやりする、ボーッとする、ポツとする、きょんとする

TypeA II (生理的感觉)

ずきずきする、きりきりする、がががする、じんじんする、ちかちかする、ちくちくする、くらくらする、ひりひりする、ぴりぴりする、どきどきする、むかむかする、むずむずする、ぞくぞくする、ごろごろする、がくがくする、しくしくする、ちくつとする、ふらつとする、むつとする、すつとする、ぞくつとする、すつきりする、ぐったりする、ひんやりする、だらんとする

TypeB : 「する」と「だ」が両方付加できる。「(すべすべした類)」のように名詞を修飾する場合は「する」が「した」の形になり助詞「の」が付加される事もある。

ふらふら (だ/する)、ぐらぐら (だ/する)、ざらざら (だ/する)、さらさら (だ/する)、つるつる (だ/する)、ぬるぬる (だ/する)、ねとねと (だ/する)、べとべと (だ/する)、べたべた (だ/する)、すべすべ (だ/する)、ふわふわ (だ/する)、ごわごわ (だ/する) しよぼしよぼ (だ/する)、ぐじゅぐじゅ (だ/する)、かさかさ (だ/する)、がさがさ (だ/する)、よろよろ (だ/する)、ふにゃふにゃ (だ/する)、ぐにゃぐにゃ (だ/する)、ぷりぷり (だ/する)、さくさく (だ/する)、こりこり (だ/する)、もちもち (だ/する)

TypeC : 「だ」が付加されな形容詞的用法がある。³「する」は付加されない。状態の変化を表す場合は、「くたくたになる」のように「だ」は「に」(「だ」の連用形)に変化する。

¹ 「ごくごく」「ぜーぜー」など擬音語的なものは除く。「うろろう」「にこにこ」など動作性・外見表出性が高いものも除く。

² 「ぼんやり、うっかり、びっくり、がっかり、うんざり」などでは、「ぼんやりした人」を「ぼんやりだ」、「うんざりした状況」を「うんざりだ」など、象徴的な名詞に「だ」を後接することがあるが、動詞用法の方が一般的であると判断する。

また、「ごろごろする」など複数の意味を持つものについては、「(目が) ごろごろする」など心身の状況を表すもののみ扱う。

³ 「?カラカラな喉」の様にナはやや不自然であるが全く許容されないわけではないので、便宜的にこのグループをナ形容詞と見なす。

くたくただ、からからだ、ぺこぺこだ、ぱんぱんだ、ぺたんこだ、へとへとだ、ぐちょぐちょだ、びちょびちょだ、しわくちゃだ、しわしわだ、がびがびだ、めろめろだ、ずたずただ、ぼろぼろだ、べろんべろんだ

TypeD：「する」や「だ」が付加されず、原型で副詞用法のみに用いられる。

すやすや（眠る）、とろとろ（眠る）、ぶるぶる（震える）、ふるふる（震える）、わなわな（震える）、ぐっしより（濡れる）ぴくぴく（痙攣する）⁴

◆アクセント

動的な擬態語（動詞、副詞用法）・・・第1モーラにアクセント

静的な擬態語（形容詞、名詞用法）・・・無アクセント⁵

(1) いらいら：HLLL<TypeA>ふらふら：HLLL<TypeB 動詞用法>すやすや：HLLL<TypeD>

(2) くたくた：LHHH<TypeC>ざらざら：LHHH<TypeB 形容詞用法>ぬるぬる：LHHH<TypeB 名詞用法>

◆部位限定性

表1：体感部位と擬態語（述語形態の現在形ではガ格主語が示す身体部位は話者自身の場合しか許容されない）

頭	ずきずき、がんがん、ふらっ、くらくら	脚（膝）	ふらふら、ぐにやぐにや、ふらっ、ぐらぐら、がくがく、がたがた、よろよろ、かくん
のど	からから、いがいが、がらがら	傷口	ずきずき、きりきり、じんじん、ひりひり、ぴりぴり、むずむず、ちくちく、がんがん、じゅくじゅく、じくじく
心臓（胸）	どきどき、どくどく、どっきん	目	ちかちか、じんじん、ごろごろ、ぼんやり、ちらちら、くしゃくしゃ、しょぼしょぼ、ぴきぴき
胃	ずきずき、きりきり、ちくちく、むかむか、がんがん、しくしく	鼻	むずむず、ぐじゅぐじゅ、すーすー、ぐすぐす
腹	ぺこぺこ、しくしく、ぱんぱん	耳	つーん、きーん、がんがん
背中	ぞくぞく、むずむず、ぞっ	歯	ずきずき、ちくちく、きりきり、ぐらぐら、がたがた
手足（皮膚）	ずきずき、ちくちく、ちくっ、じんじん、ひりひり、むずむず、ぱんぱん、ぴりぴり、ぴくぴく、ぶるぶる、しわしわ、がさがさ、かさかさ、だらん	舌	ひりひり、ぴりぴり、ざらざら、からから

3. 擬態語動詞

影山(2005:1-2)は、擬態語動詞の語彙概念構造を考察し、「する」が持つ意味構造に擬態語の意味が組み込まれ、全体の意味は通常の動詞と実質的に同じになると述べており、田守(1993: 45-47)では、人間の心理・感覚を記述する「擬情語」は例外なく動詞組み入れが可能と述べ、物事の性質を表すものとの相違を示唆している。関口(2012:2-5)は、「ちくちくする」などダイレクトな一次的反応（五感）を表すものを感覚動詞とし、触覚を表す擬態語が著しく多い事を指摘している。TypeA I、AII、Bの擬態語動詞の動詞的性質について観察する。

3. 1 アスペクト

◆ アスペクト性を持つ時間句との共起（*は許容されない、?!はかなり不自然であることを示す）

<TypeA I：心理的感情>

(3) 今日は大事な会議があるので、朝からいらいらしている（*する）。(継続性)

(4) 娘が運転する間中いつも私ははらはら（びくびく）している（*する）。(継続性)

⁴ 「この体勢を取ると腹筋がぶるぶるします」「背中がぐっしよりしている」など「する」が動詞の代用として用いられる場合もある。また、「渋滞でいらいらが募る」、「薬剤でパイプのぬるぬるを落とす」のような名詞用法（田守(1993)）、「どっきり（番組）」「ぎっくり（腰）」などの名詞複合語、TypeA、Bには「ずきずき痛む（痛い）」、「ふらふら揺れる」、「つるつる滑る」などの副詞用法もあり、用法は多岐にわたっているが、本研究では各擬態語の本来的と思われる意味用法によって分類した。

⁵ Tsujimura(2001)では擬態語は統語範疇がないとしているが、アクセント型を対比して何らかの相違を示唆しており、影山(2005)をはじめ他の先行研究でも同様の指摘がある。

(5) 一度失敗したくらいで、いつまでもよくよしているの。(＊するの)。(継続性)

(6) はっと(はっと、ひやっと)した瞬間(瞬間性)

<TypeA II : 生理的感覚>

(7) 二日酔いで(私は)朝から頭ががらがんする(≡している)。

(8) 試験期間中、(私は)ずっと胃がむかむか(きりきり、ちくちく、ずきずき)する(≡している)。

(9) (私は)お昼に激辛タンタン麺を食べてからずっと、口の中がひりひり(ぴりぴり)する(≡している)。

(10) すっと(ぞっと)した瞬間(瞬間性)

<TypeB>

(11) ??朝からずっと手の甲がすべすべする(??している)。

(12) ＊つるつる(すべすべ、ぬるぬる)した瞬間

TypeA I の心理的な擬態語動詞は、「する/している」で比較的明確なアスペクト対立が認められる。⁶「いらいら」「はらはら」の様な「○×○×」型の畳語タイプは一定期間、「はっと」「がっかり」など「○っと」「○っ×り」型の促音タイプは瞬間を表す時間句と共起する。⁷

TypeA II の生理的擬態語動詞では、現在の状況を表す場合「する」が無標であり、畳語タイプで「する/している」の対立はそれほど明確ではないが、促音タイプでは比較的明確な瞬間のアスペクトが認められる。

TypeB は、時間句と共起せずアスペクトは殆ど見られない。

(13) (私は)手の甲がさがさがさする/している/だ。

(14) (私は)汗で背中がべとべとする/している/だ。

(15) 糊を塗ったばかりで、紙がべとべとする/している/だ。

(13)(14)の様に「する/している/だ」の違いが殆どなく、(15)は物の状態を表す評価的な形容詞文であり、感覚主体の体感から物の様態説明に焦点が移っている。

TypeA の擬態語は元々時間的性質を持つために動詞形態で時間句と共起すると思われるが、TypeA I は主体(Experiencer)の直接的な心理状況を表すので一般的な心理動詞に近く比較的明確なアスペクトが見られるのに対し、TypeA II は感覚主体の認知によって特定部位(頭、胃、手足 etc.)の状況や異常などの間接的な変化対象(Theme)を表すため、アスペクトが明確に現れないと判断する。TypeB も擬態語が持つ時間的性質のために動詞用法が定着したと思われるが、同時に形容詞用法もあり、感覚主体が触感や体感によって対象(Theme)に感じた状態の感覚を表す。アスペクト性は殆ど見られず、TypeA I、A II に比べ状態性がかなり強いと思われる。また、瞬間や変化のアスペクトを含意する促音タイプの擬態語が TypeB、C に殆ど無く、状態性が強い事を示している。

3. 2 動詞の意味的性質

◆ 他動性(目的語(ヲ格)をとらない)

<TypeA I : 心理的感覚>

(16) ＊私はいつもバスの延着をいらいらする。(私はいつもバスの延着に(感情の対象)いらいらする。)

<TypeA II : 生理的感覚>

(17) ＊私はいつも二日酔いを頭がずきずきする。(??私はいつも二日酔いに頭がずきずきする。)

<TypeB>

(18) ＊私はいつも残業が目がしょぼしょぼする。(??私はいつも残業に目がしょぼしょぼする。)

いずれも他動性がなく全て自動詞と判断される。

◆ a.命令文、b.禁止命令文、c.意向形

<TypeA I : 心理的感覚>

⁶工藤(2014: 45-50)では「いらいらする」のような動詞を「一時的な静的現象を表す状態動詞」としてアスペクトを認めていない。

⁷音声と意味の関与については既に指摘されており『日本語オノマトペ辞典』では、同じ音形が繰り返される畳語型は音や動作・状態の継続・繰り返しを表現するとしている。浜野(2014: 52)は促音を含むオノマトペは変化性、瞬間性を内包し「ぴかっと」「ぱたっと」のような語末の促音「っ」は音や運動が急激に終結することを示すとしている。

(19)a. *いらいらしなさい b. いらいらするな c. *いらいらしよう

<TypeA II : 生理的感觉>

(20) a. *頭がずきずきしなさい b. *頭がずきずきするな c. *頭がずきずきしよう

<TypeB>

(21) a. *目がしょぼしょぼしなさい b. *目がしょぼしょぼするな c. *目がしょぼしょぼしよう

TypeA I の(18)a.c.では、「いらいらする」「はらはらする」など望ましくない感情を表すものは意味的制約から命令形や意向形をとりにくい、肯定的な「風呂に入ってさっぱりしなさい」「風呂に入ってさっぱりしよう」などは許容される。また、望ましくない感情を表すものは、b.禁止命令文では「がっかりするな」「くよくよするな」「びくびくするな」など殆ど許容される。しかし、TypeA II、TypeB では、どのような文脈を設定しても全て許容されない。

◆ 使役受身文（非対格動詞の主語は使役受身文の主語にできない）

<TypeA I : 心理的感情>

(22) 私はいつもこの開かずの踏み切りにいらいらさせられる。

<TypeA II : 生理的感觉>

(23) *ヒロシはいつも二日酔いで頭がずきずきさせられる。

<TypeB>

(24) *花子はいつも残業で目がしょぼしょぼさせられる。

以上のテストにより、TypeA I は心理主体を Experience として主語にとる非能格動詞、TypeA II は変化対象 Theme を主語にとる非対格動詞と考えられ、TypeB も感覚対象 Theme を主語にとる非対格動詞と判断する。

アスペクト性や非能格性などの擬態語動詞の性質の相違は、それぞれの擬態語が元々持っている性質の相違によるものであると考える。

4. オノマトペ度と語彙性

田守・Schourup (1999)では、8項目⁸の基準でオノマトペ度、語彙性を測定している。類像性が高くオノマトペ度が高いものほど、語彙性が低い。この基準を援用すると、TypeABC よりも TypeD はオノマトペ度が高い傾向が見られ、この結果は TypeD が述語を形成せず副詞用法のみに固定化している現象と合致している。

◆ 「引用的に用いることができる」「漫画にラベルとして起こるかどうか」のテスト（田守(1999:200-201)）

(25) *ずきずき(A) *ざらざら (B) *ぐにやぐにや (C)・・・オノマトペ度低（語彙性高）

(26) ぶるぶる (D) わなわな (D)・・・オノマトペ度高（語彙性低）

◆ 「～という～」への置き換えができるかどうかのテスト

(27) ??ずきずきという痛み(A) *ざらざらという手触り (ok ざらざらした手触り)、*さくさくという食感 (ok さくさくした食感) (B) *ぐにやぐにやという感触 (C)

(28) すやすやという寝息を立てて寝る (D)

Akita(2009)では、擬声語、擬音語は音声的類像性が高く付加詞など周辺に位置し、擬情語、擬態語は類像性が低く述語など主節の核に位置し易いと述べている。擬声語、擬音語には「する」や「だ」と結びついて述語になるものが少なく、多くは副詞用法であり幼児語のイメージが強い。

(29) *リンリン（カーン、ザーザー）する/だ。

(30) トントン（ペンペン、グチュグチュ、フーフー）する、ポンポン（お腹）、ワンワン（犬）

5. 擬態語の品詞性

TypeA I の心理的感情の擬態語動詞では心理動詞同様、感情の対象が「に格」名詞句で表されるが、「する」単

⁸ a.音を表すb.「と」を義務的に伴うc.引用的に用いることができるd.文外で独立して用いることができるe.「XというY」構造に用いることができるf.具体的な描写力があるg.漫画にラベルとして起こるh.「と」の代わりに「て」を伴うことができる、の8項目を基準に設定している。

独では「に格」をとらない。

(31) 私は大きなクラクションの音にははとした。

(32) *私ははと大きなクラクションの音にした。

従って、「は」とは瞬間的な心理変化と感情の対象の両方の意味要素を本来的に持ち、「する」と結びついて動詞的性質が完成される。擬態語は本来的な性質がそれぞれ異なり、それぞれの時間的性質や状態的性質などに応じて付加要素が選択され述語形態が決まるが、述語の項構造や身体部位の限定性などの情報も同時に擬態語が本来的に持っているとは判断する。

TypeA は時間性をもち「する」と結びついて動詞述語を、TypeB は時間性、状態性を両方持ち「する」と「だ」両方と結びついて、それぞれ動詞、形容詞述語を、TypeC は状態性をもち「だ」と結びついて形容詞述語を形成する。TypeD は擬態語のオノマトペ度が高く、述語形態をとらずに原型で副詞用法に特化している。

時間的（動詞的）、状態的（形容詞的、名詞的）性質の点で、擬態語の語彙特性は一様ではないことが観察された。TypeA、B、C、D の語彙特性を表2に示す。（○＝許容、△＝一部許容、×＝許容されない）

表2：擬態語の語彙特性 動詞性 → 形容詞性 → 名詞性

	Type	A		B	C	D
	語彙特性	A I	A II			
動詞性 ↓ 形容詞性 ↓ 名詞性	「する」の付加	○	○	○	×	×
	アスペクト性	○	△	×	×	×
	非能格性	○	×	×	×	×
	「だ」の付加	×	×	○	○	×
	オノマトペ度	×	×	×	×	○

TypeA I（感情）、A II（感覚）、B、C、D の順で、動詞性が高く、TypeD は最も動詞性が低く名詞性が高い事が観察された。しかし、多くの擬態語で用法が多様化しており、単独で間投詞的に用いる事もできるので、擬態語自体の品詞性を考えると、やはり名詞性が強いと判断する。⁹

加藤(2015: 55-56)は名詞、副詞、ナ形容詞、連体詞を「体詞」として一つのグループにくくる事を提唱し、名詞修飾の際の形態「～の」、「～な」は名詞・ナ形容詞分別の決定的証拠ではないと述べている。また、名詞の区分として、一時的状況を表す語彙群と、時間性を意味に含まず永続的状況を表す語彙群との区分を提案している。

この区分に従うと、TypeA は動作名詞、TypeB は両用名詞、TypeC は状態名詞、TypeD は副詞用法に特化した普通名詞に近い。¹⁰ 表3で加藤(2015)の名詞区分と本稿の擬態語区分を示す。（＋＝許容、－＝許容されない）

表3：名詞の区分（＝加藤(2015:58)「表2：名詞の区分」）

		「Xスル」で動詞に用いる	
		＋	－
「Xな」で形容動詞に用いる	＋	両用名詞(B)	状態名詞(C)
	－	動作名詞(A I II)	普通名詞(D)

最もオノマトペ度が高いTypeD が、「スル」や「な」がつきにくく、最も「名詞らしい名詞」である「普通名詞」に該当することは、オノマトペが本質的に強い名詞性を持つことを示唆していると思われる。

6. おわりに

感情や感覚を表す擬態語を用法に着目して分類し、語彙特性について調べた。擬態語動詞については従来、状

⁹ 「研究」「到着」など動作性を内包する名詞は「研究する」「到着する」の様に「する動詞」を形成し、「聡明」「謙虚」などの形容詞性を内包する名詞は「聡明だ」「謙虚だ」の様にナ形容詞を形成する。擬態語の述語化もこれと平行的に考えられる。

¹⁰ 加藤(2015: 60)は、擬態語「ゆっくり」「しっかり」は体詞（副詞類、連用詞、H類）と分類しているが、他の擬態語についての記述はない。

態性の強い動詞として位置付けられてきたが、継続性や瞬間性などのアスペクトを持つものも認められ、畳語、促音などの音声的形態的な相違がアスペクトの相違に関与することが観察された。また、感情、感覚の意味の相違は非能格性、非対格性という動詞の意味構造の相違にも関与することがわかった。

オノマトペ度の低いものは擬態語動詞などの述語形態をとり、オノマトペ度が高いものは述語用法を持たず副詞に特化し、高い名詞性を示すことがわかった。従って、オノマトペの本来的な性質は名詞性にあると思われる。

近年、医療・福祉分野をはじめとする各分野で、オノマトペの効率的使用の有益性が注目されてきている。音声と意味の関与や語彙特性について、言語分析や言語対照を通じてさらに詳しく調べることを今後の課題とした。い。(本研究の一部は科学研究費(課題番号: 15K02670(H27-29))の研究助成によって行われました。)

<参考文献>

- Akita, Kimi(2009) *A grammar of sound-symbolic words in Japanese: Theoretical Approachs to iconic and Lexical Properties of Mimetics*. Ph.D. dissertation, Kobe University.
- 浜野祥子(2014)『日本語のオノマトペ』くろしお出版.
- 影山太郎(2005)「擬態語動詞の語彙概念構造」第2回中日理論言語研究会発表要旨.
- Takehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, Lawrence Schourup(1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*, 2 vols. Mouton de Gruyter.
- 加藤重広(2015)「形容動詞から見る品詞体系」『日本語文法』15 巻2号, 48-64, くろしお出版.
- 工藤真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.
- 三原健一(2008)「いわゆるナ形容詞の結果述語を巡って」金子義明他(編)『言語研究の現在: 形式と意味のインターフェイス』, 99-114, 開拓社.
- 関口美緒(2012)「日本語感覚動詞の特徴—生理的現象から言語表出へのプロセスを考える—」言語と交流研究会(編)『言語と交流』第15号, 1-13.
- 田守育啓(1993)「日本語オノマトペの統語範疇」筧壽雄・田守育啓(編)『オノマトピア擬音・擬態語の楽園』, 17-75, 勁草書房.
- 田守育啓・Lawrence Schourup(1999)『オノマトペ—形態と意味—』くろしお出版.
- Tsujimura, Natsuko(2001)“Revisiting the two-dimensional approach to mimetics: A reply to Kita(1997),” *Linguistics* 39, 409-418.
- 吉永尚(2008)『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院.
- 吉永尚(2016)「心身の状況を表す擬態語動詞についての素性分析」園田学園女子大学論文集第50号, 21-28.

<語彙データ>

- 小野正弘編『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館、浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典(角川小辞典12)』角川書店、飛田良文・浅田秀子『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版、国際交流基金『日本語でケアナビ』、国立国語研究所 BCCWJ、廣部久美子・吉永尚『日中英医療介護 Helthcare』スマートフォン用アプリ(Apple)